

【2010年(平成22年)資源評価対象種(太平洋漁業資源)の資源状況】

魚種名	系群名	2010年 資源状態	
		水準	動向
マアジ	太平洋系群	中位	減少
マイワシ	太平洋系群	低位	増加
マサバ	太平洋系群	低位	横ばい
ゴマサバ	太平洋系群	高位	減少
スケトウダラ	太平洋系群	中位	横ばい
サンマ	太平洋北西部系群	中位	減少
ズワイガニ	太平洋北部系群	中位	横ばい
スルメイカ	冬季発生系群	中位	横ばい
サメガレイ	太平洋北部	低位	横ばい
ヤナギムシガレイ	太平洋北部	高位	増加
ヤリイカ	太平洋系群	中位	増加
トラフグ	伊勢・三河湾系群	中位	横ばい
キチジ	道東・道南	低位	増加
	オホーツク海系群	低位	減少
	太平洋北部	中位	増加
キアンコウ	太平洋北部	高位	減少
シャコ	伊勢・三河湾系群	低位	横ばい
イカナゴ	伊勢・三河湾系群	高位	横ばい
マアナゴ	伊勢・三河湾	中位	横ばい
マダラ	北海道	中位	増加

魚種名	系群名	2010年 資源状態	
		水準	動向
カタクチイワシ	太平洋系群	中位	減少
ヒラメ	太平洋北部系群	高位	横ばい
ホッケ	道南系群	低位	横ばい
イトヒキダラ	太平洋系群	中位	減少
ブリ		中位	増加
ニギス	太平洋系群	中位	横ばい
ウルメイワシ	太平洋系群	中位	減少

※1 太平洋南部会で議論される資源回復計画の対象種を黄色のセルで示した。

※2 各魚種の資源評価の内容については、「平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)」
<http://abchan.job.affrc.go.jp/digests22/index.html>
 を参照。

平成 21 年度キンメダイ資源動向調査総括報告書

責任担当水研: 中央水産研究所

参画機関: 千葉県水産総合研究センター、東京都島しょ農林水産総合センター、
神奈川県水産技術センター、静岡県水産技術研究所、高知県水産試験場

1. 生態

(1) 分布・回遊

本種は浮遊生活期を経て、海山等の海底付近で生活する。着底海域に滞留する個体と着底後数年後から広域移動する個体に分かれる。

(2) 年齢・成長

耳石年齢査定による最高齢個体から寿命は 26 歳以上であると推定される。

(3) 成熟・産卵

成熟開始年齢は満 3 歳(尾叉長 28~32 cm)、産卵期は主に夏季(6~10 月)、産卵場は房総から、相模湾、伊豆諸島、四国、九州、小笠原にある。

(4) 被捕食関係

胃内容物として魚類が最も多く、他にエビ類、イカ類、大型プランクトンが出現する。周年、我が国太平洋沿岸および海山付近で索餌する。捕食者の詳細について不明であるが、操業時にサメやイルカによる食害が報告されている。

2. 漁業の特徴

キンメダイは九州南方から北海道南部に至る太平洋沿岸から小笠原諸島海域に分布し、主に房総沖から伊豆半島周辺、伊豆諸島周辺、室戸岬周辺の海域において、底立延縄、立縄、樽流し、一本釣り等によって漁獲されている。本種を漁獲しているのは、主に千葉県、東京都、神奈川県、静岡県、高知県(以下、1 都 4 県)であり、これらの都県ではそれぞれ資源保護のため、禁漁期や操業規約を設定する等、資源管理型漁業の対象魚種に指定して管理に努めている。この他、小笠原公海、南西諸島周辺、東北沖、中部北太平洋公海域の天皇海山周辺海域等においても、底立延縄、底刺網、トロール等によって漁獲されている。

3. 漁獲の動向

我が国周辺のキンメダイは現在では農林水産省による漁獲量調査の対象とはなっていないため、本種を主に漁獲している 1 都 4 県の水産研究機関の集計による漁獲量を取りまとめた。1980 年から 2004 年では 5 千~1 万 1 千トンの間を増減しており、2005 年から 2008 年では 7,200~7,600 トン程度で安定していた。2009 年にはやや減少して 6,719 トンとなった。水産庁資料による天皇海山周辺海域における漁獲量は、1980 年には 11,831 トンのピークに達したが、近年では大きく減少している。2009 年では着底トロール 1,080 トンおよび底刺し網 229 トンとなった。我が国は、天皇海山海域における脆弱生態系や深海漁業資源の持続的利用に配慮して、底魚漁業の漁獲圧力を過去 10 年間の平均値から 2 割削減する等の規制を 2009 年 1 月より自主的に導入している。

4. 資源評価法

1都4県の漁獲量と各漁法のCPUEの経年変化及び漁獲物の体長組成の経年変化から、我が国周辺における現在の資源状態を判断した。

5. 資源状態

1都4県における近年のキンメダイの漁獲量は、静岡県と神奈川県で減少して東京都で増加している。都県により増減があるものの、近年の漁獲量は一都四県全体としては6,000トンから8,500トンの間でほぼ安定している。

立縄や底立延縄等を用いて水深の大きな海域で操業するキンメダイ漁業では、速い潮流が漁獲効率を下げる可能性があることから、CPUEは漁場への黒潮離接の程度によって変化すると考えられる。2004年において神奈川県や伊豆大島漁協のCPUEが低下したのは、黒潮の接岸によるものであったと推定される。また、2005年に千葉県島周り、八丈島、神奈川県、静岡県でCPUEが上昇したことは、黒潮の離岸傾向が続いたことによると解釈される。漁場によってこのような変動はあるものの、CPUEは全体的には増加あるいは減少の傾向は認められない。

漁獲物の体長組成の年変化を見ると、都県によって小型魚の出現状況は異なる。高知県室戸岬水揚げの体長組成において、2001年に29cmにモードを持つ年級群が突出した。この年級群は体長と年齢の関係から4歳であると考えられ、2004年まで体長組成上で突出していたことから卓越年級群であると判断された。この年級群の存在は、高知県の樽流しのCPUEが2000年以降概ね高水準を維持していた一因であると解釈される。一方、東京都(八丈島近海)では、2002年以降に小型魚の加入がみられずに体長組成は徐々に大型化し、2008年では33cm以下のものがほとんど見られなくなっていた。このことから、漁獲物の高齢化が考えられ、いずれ漁獲量が減少に転ずる可能性が指摘されていたが、2009年には33cm以下の小型群が出現した。このように、漁獲物の体長組成の特徴は都県により異なるものの全体として大きな変化は見られず、小型魚は順調に出現している。

以上から、我が国周辺のキンメダイの資源水準は中位であり、資源動向は横ばいであると判断される。

6. 資源管理方策

各都県において資源保護策を含む資源管理方策が実施されており、これらを尊重して管理方策の推進に連携、協力することが望ましい。回遊経路、加入過程、系群構造といった生物学的特性の知見も各機関の努力と漁業者の協力によって知見が蓄積されつつあり、これらを資源管理へとつなげる努力の継続が望まれる。太平洋沿岸及び天皇海山の底曳き網・底刺網漁業、小笠原公海域の底刺網漁業を含めた資源管理方策の検討が必要である。系群構造・回遊生態等の解明のための調査活動を継続するとともに、漁業情報によって資源状態のモニタリングを継続し、フィードバックによる資源管理の可能性を検討する。

7. 資源評価まとめ

資源水準は中位、資源動向は横ばい。